

アメリカの貨幣制度

— J.L. ラフリンの貨幣論 — (3)

Bimetallism and the Gold Standard in the 19th Century U.S. (3)

片 桐 謙
Katagiri, Ken

目 次

- 1 はじめに
- 2 J.L. ラフリンと研究活動
- 3 前史
 - 3.1 銀本位から金本位へ
 - 3.2 グレシャムの法則 (以上, 304号)
- 4 グリーンバックス期
 - 4.1 グリーンバックス
 - 4.2 グリーンバックスの価値
- 5 大不況期
 - 5.1 「1873年の犯罪」
 - 5.2 自由銀運動の本質
 - 5.3 大不況の分析 (以上, 305号)
- 6 金本位制
 - 6.1 貨幣としての金と銀
 - 6.2 国際金本位制の成立
 - 6.3 「パラシュート効果」の把握 (以上, 本号)

6 金本位制

6.1 貨幣としての金と銀

大衆レベルでの自由銀運動に加えて、1890年代には F.A.Walker を中心とする経済学者からも複本位制を求める声が起こり、複本位制の採用は理論・実証両面で学界レベルの論争に発展した。これに関して、ラフリンは次のように述べている。「1873年頃、銀の価値が金に対して下落し始めると、そして多くの国が銀を廃貨するようになると、さまざまな筆者が、それに伴う1865年から1896年の物価下落は金属貨幣の不足のためであると示唆した。それ故、世界の流通で金ストックに銀ストックを追加することによって、一般物価水準を維持する手段として複本位制が提案された。そして物価下落によって世界の債務負担は増すので、もし複本位制が物価下落を防ぐならば、それはこの債務負担を軽減するようにはたらくだろうとも主張された。この言及から複本位制論者は通常、物価は貨幣の過剰または不足によって規定されるという理論の信奉者だった、と考えられる。」⁽¹⁵⁶⁾ 複本位制を巡る論争は、貨幣数量説の妥当性という問題を伴って展開した。そしてラフリンにとって、複本位制を支持する論理と貨幣数量説とは密接不可分のものと考えられた。「あらゆる国々で貨幣数量説を強調する多くの種類の書物を見つけることができる。なぜならそれは複本位制の本質的な基礎だからである。世界の貨幣作用の増加を果たすには金量が不十分だからという理由で、金と銀を共に同時に用いることが主に論じられる限り、複本位制に賛成する議論には必ず貨幣数量説を見出すことができる。」⁽¹⁵⁷⁾ 本節の論点は、ラフリンが両者の間にいかなる論理的関連を見出し、両者を共に否定したのか、にある。

既に3.1でみたように、ラフリンは金銀市場比価は法定比価から不断に乖離するという理由で、実態としての複本位の存在自体を否定する。法制上は複本

(155) Walker (1897)

(156) (1931) 1, pp454-455

(157) (1903) p281

位制であっても、法定比価と市場比価、両者の関係によって、実態としては、金本位あるいは銀本位となる。これは Jevons のいう「金・銀選択本位制 (alternative gold and silver standard)⁽¹⁵⁸⁾」に他ならない。しかしラフリンは 1870 年以降、金本位制しかありえないという。

1870 年代に、それまで銀本位制、金銀複本位制の諸国がいわばドミノ倒しのよう相次いで金本位制を採用し、国際金本位制が形成された。一般に、その主要な要因は、銀の減価と考えられている。合衆国の銀鉱山の発見による銀の生産増加に加えて、ドイツが銀を廃貨したことにより、銀の供給過剰が銀の価値を引き下げた。そして銀の減価と、それによるインフレ圧力回避のためのヨーロッパ諸国による銀の廃貨がスパイラル的に進行した、というものである。

イギリスで 1876 年に下院に提出された『銀の下落に関する特別委員会報告書 (*Report from the Select Committee on Depreciation of Silver together with the Proceedings of the Committee, Minutes of Evidence, and Appendix*)』(以下、『1876 年報告書』)は、1873 年以降の「銀の価格の下落 (the depreciation of the price of silver)⁽¹⁵⁹⁾」を、以下の六つの原因に求めた。すなわち (1) ネヴァダ州での豊かな新銀鉱山の発見、(2) 1871 年以降のドイツの銀本位制から金本位制への移行、(3) インドへの輸出のための銀需要の増加、(4) スカンジナビア諸国の金本位制の採用、(5) 1874 年以降のラテン貨幣同盟による銀の自由鑄造停止、(6) オランダの銀貨鑄造停止と金貨の鑄造⁽¹⁶⁰⁾、である。

それ以後も金に対する銀価格の下落が持続するという現象を受けて、同じくイギリスで 1886 年に金銀委員会 (Gold and Silver Commission) が設立された。その役割は銀価格下落の原因、そしてそれが銀本位国インドとの貿易に与える影響を解明し、その弊害に対処するための改善策を提案することだった。そして 1888 年の『最近の貴金属の相対価値の変化の調査のために指名された王立委

(158) Jevons (1923) p137

(159) Select Committee on Depreciation of Silver (1876) piii

(160) Select Committee on Depreciation of Silver (1876) piv

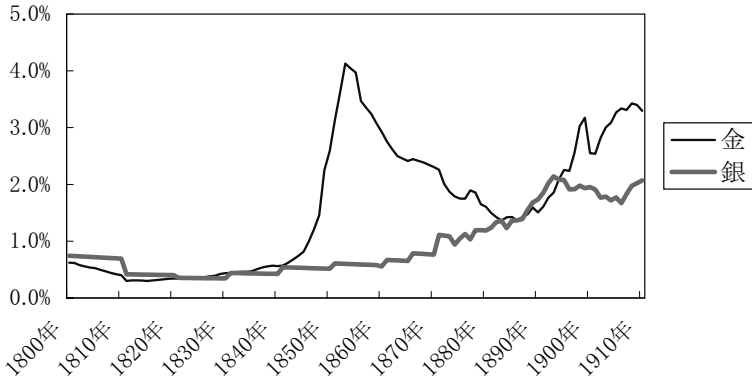
員会最終報告書 (*Final Report of the Royal Commission Appointed to Inquire into the Recent Changes in the Relative Values of the Precious Metals;with Minutes of Evidence and Appendixes*)』(以下、『1888年報告書』)では、金銀の相対価値の変動を、『1876年報告書』の挙げた銀の需要・供給要因に加えて、金の需要・供給要因からも分析し、さらに金本位制国と銀本位制国間の為替相場が金銀比価の動向に対応して変動しているという点でも、意見は一致した。

19世紀の金および銀の生産量の推移を表したのが、図4、5である。金のフローの対ストック比は1850年代と、1890年から20世紀の始めにかけて二度上昇し、銀のそれは1870年以降、なだらかに上昇した(図4)。金・銀のストックを比較すると、1850年を境に著しい変化があった(図5)。いずれにおいてもストックを重視したのは、以下でみるようにラフリンの思考に従ったためである。

国際金本位制の形成と銀価格の下落、または金銀比価の動向(図3)との関連を分析することは、ラフリンの論じる金本位制形成の必然性を探るうえでかぎとなる。ラフリンは『合衆国における複本位制の歴史』において『1876年報告書』を祖上に載せ、先の六つは表面的原因に過ぎず、事態のより根本的な原因を全く考慮していないと批判している⁽¹⁶¹⁾。彼によれば、この時、生じたのは銀の価格の下落ではなく、銀の価値の下落、すなわち銀の減価(*depreciation of silver*)であった。そしてこの銀の価値の下落を1870年代以降の事情から説明することは事態の本質を見失うことになる。1873年以降の銀の価値下落の根本的な原因は、1850年以降の金生産の増加にある、という。金生産の増加によって、なぜ銀の価値が下落するのか。ラフリンは、『1876年報告書』の内容を先のように批判した後、同委員会での証言者の一人、R.Giffenの主張を次のように肯定的に引用している。「実際、供給の問題から離れ、需要の問題を取り上げる時、委員会は真の説明に言及したに過ぎなかった。彼らは主張する、『証言でGiffen氏によって、正しく指摘されたように、金属の使用において変化が生じている。金は、以前よりもより一般的に用いられるようになり、実際、金と銀それぞれを用いてい

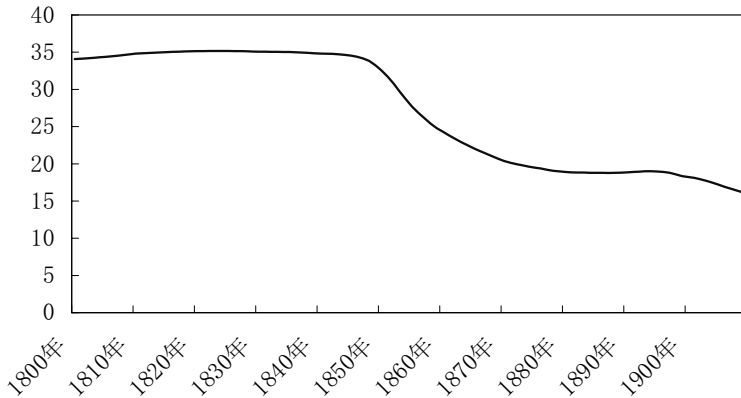
(161) (1896) pp164-165

図4 金・銀年間生産量の対ストック比



(出所) 金は, U.S.Commission (1982), pp188-189 TableSC-2, pp195-197 TableSC-6, 銀は, Director of the Mint (1913), p250, U.S.Department of Commerce Bureau of Mines (1930), pVI Table1, p5 Table4, p4 Table3 より作成。金に関しては, League of Nations (1930) pp82-84 TableB も参照した。

図5 金ストックに対する銀ストックの比率



(出所) 金は, U.S.Commission (1982), pp195-197 TableSC-6, 銀は, Director of the Mint (1913), p250, U.S.Department of Commerce Bureau of Mines (1930), pVI Table1, p4 Table3, p5 Table4 より作成。

さまざまな国の交易条件および状況は、全く変化している。⁽¹⁶²⁾』と。ラフリンは、Giffen のいう「金属の使用における変化」が1873年以降の銀の減価の「真の説明」だと、積極的に評価している。この「金属の使用における変化」を手がかりに、以下、ラフリン自身の説明を追跡していこう。

ラフリンによれば、貨幣として最終的に金と銀が選ばれた。両者を比べると、金は最小の量で最大の価値をもち、その他自然的属性の点でも銀に対して優位性をもつ。こうして金に対しては貨幣としての選好が常に潜在的にある。⁽¹⁶³⁾「しかしアメリカ大陸発見以後、1850年まで、銀は長期間にわたって最大の供給だった。それ故、しばしば本位として用いられた。」⁽¹⁶⁴⁾ラフリンにとって、貨幣として選択される金属に関する「唯一の問題はむしろ、誰もが認めるように、供給が十分かどうか」という点である。⁽¹⁶⁵⁾1850年以前は、銀の供給が多く、金の供給は少なかった。金への潜在的な貨幣的需要にも係わらず、貨幣需要は金によっては満たされなかった。そのため複本位制により、法定比価を、不断に変動する市場比価に一致させようとする一連の空しい努力が繰り返された。しかし実際は両者の関係によって、貨幣需要は時には銀によって、または金によって満たされた。すなわち1850年以前、貨幣として金と銀は代替関係にあり、グレシャムの法則は金にも、銀にも対称的に作用した。⁽¹⁶⁶⁾

ラフリンは、1850年以後の金生産の増加はフローではなく、ストックで捉え

(162) (1896) pp166-167 強調部分は、本文においても、以下の原資料においても、イタリック。cf. Select Committee on Depreciation of Silver (1876) p v, p20

(163) 1850年代以降、国際的な商取引の拡大に伴い、必然的に大口取引の決済、特に国際収支の差額の決済、の必要性が生じた。この金の銀に対する優位性は、輸送費や保険料等からなる現送費、いわゆる流通空費、の節約という点で実質的意義をもつ、と考えられる。ラフリン(1896, p152)も同様の考えであった。この流通空費の節約という点での金の優位性は、現送費が決済のための地金の重量に応じて決定されるという暗黙の了解に基づいている。この点に関して、表1は1868年当時の地金現送費を示している。この表によれば、地金の現送費は重量ではなく金額に基づいて決定されており、しかも金と銀の間で現送費に実質的な差はなかった。E.Seydは金と銀の代替性に基づき、複本位制を主張した。

(164) (1896) p113, p167

(165) (1931) 1, p443

(166) (1896) p115

表 1

**RATES OF FREIGHT and INSURANCE
for BULLION from or to LONDON.**

		Freight.	Insurance.	
PARIS	- By S. E. Railway or Messageries Impériales			
	For sums between £800 and			
	£4000—for every £100	- 4s 7d		
	For sums above £4000	- 4s	$\frac{1}{10}$ o/o	
BOULOGNE	} By General Steam Navigation Company			
CALAIS				
ANTWERP				
ROTTERDAM		For sums up to £5000	$\frac{1}{8}$ o/o	
HAMBURG		„ above „	$\frac{1}{8}$ „	$\frac{1}{10}$ „
ST. PETERSBURG	By Steamer	- - - $\frac{1}{8}$ „	$\frac{1}{4}$ „	
MADRAS	} By Peninsular and Oriental Steamships			
BOMBAY				
CALCUTTA		- - - 2 o/o	$\frac{1}{8}$ „	
HONG KONG	Do.	2 $\frac{1}{4}$ „	$\frac{1}{4}$ „	
SHANGHAI	Do.	2 $\frac{1}{2}$ „	1 „	
AUSTRALIA	Do.	2	1	
	By Sailing Vessel	- - - 2d a 2 $\frac{1}{2}$ d per oz.		
NEW YORK	Per Cunard Steamers, up to 10,000	$\frac{1}{2}$ „		
	„ „ 30,000	$\frac{1}{4}$ „	$\frac{1}{4}$ o/o in summer	
	„ „ 50,000	$\frac{3}{16}$ „		
	Above 50,000	$\frac{1}{8}$ „	$\frac{1}{8}$ „ in winter	
	Other Steamers may charge lower rates.			
CALIFORNIA*	- By Pacific Mail Steamers to Panama $\frac{1}{8}$ o/o	- - - 1 $\frac{1}{8}$ „	1 „	
	„ Royal Mail Steamers from Panama to England $\frac{1}{4}$ o/o			
PANAMA	- By Royal Mail Steamers			
	For Gold	- - - 1 $\frac{1}{4}$ „		
	„ Silver	- - - 1 $\frac{3}{8}$ „	$\frac{1}{8}$ „	
VALPARAISO	- By Pacific Steamers and Royal Mail			
	For Gold	- - - 2 $\frac{1}{4}$ „	1 „	
	„ Silver	- - - 2 $\frac{1}{2}$ „		
RIO JANEIRO	- Per Steamers to Southampton	1 „		
	Delivered in London	- 1 $\frac{1}{8}$ „	$\frac{1}{8}$ „	
CAPE OF GOOD HOPE	} Per Union Steamship Com- pany from Southampton	1 $\frac{1}{4}$ a 2 o/o	$\frac{3}{8}$ a $\frac{3}{4}$ o/o	
MAURITIUS	- Do.	2 a 2 $\frac{1}{2}$ „	$\frac{3}{8}$ a $\frac{3}{4}$ o/o	

The rates of freight are exclusive of the usual Primages; the rates of Insurance include discount and commission.

* The competition between rival Steamer Lines sometimes reduces the rates of freight on the Pacific side to $\frac{1}{4}$ o/o.

なければならない、という。1493-1850年の世界の金生産は33億ドル、銀生産は74億ドル、1851-75年の金生産は33億ドル、銀生産は14億ドル、1876-95年の金生産は25億ドル、銀生産は22億ドルだった。⁽¹⁶⁷⁾このように1850年以降、それ以前とは逆転し、金生産が銀生産を上回るようになった。しかも1851-75年の金生産は1850年までの350年間の金生産にほぼ等しく、1851-95年の金生産は1850年までのそのほぼ2倍に相当する。この金生産の急激な増加の直接の影響は「疑いなく、金の価値の低下、言い換えれば、一般消費財に対する購買力の減少だった。それはどんな人類の賢明も予測し得なかった事態の一つだった。」⁽¹⁶⁸⁾そしてJevonsの1845-50年から1860-62年間の⁽¹⁶⁹⁾推定を引き、ラフリンはこの時の金の購買力の低下を9-15%であったとしている。しかし「驚くべきことに、その価値はそれ以上、下落しなかった。そして…もしその使用部面を拡大する影響がなければ、その価値は一層、低下していただろう。」⁽¹⁷⁰⁾とも述べている。この「使用部面の拡大」とは金への貨幣的需要の増加のことである。この1850年代の金の生産増加によって供給が需要に追いつき、それまで潜在的に存在していた金への貨幣的需要は、ようやく顕在化した。そのため金の価値は著しい下落をみせなかった。そしてラフリンによれば、この一時的な下落を経た後、金の価値は安定する。これが5.3「大不況の分析」で1870年代以降の物価水準の変動を規定する要因として、彼が「金のような貴金属の価値は需要と供給の変化によって影響を受けず、現在の状況のもとでこれらの変化は急激または極端にはなり得ない」⁽¹⁷¹⁾と考え、金の側の要因を捨象する根拠である。

金供給の増加の影響はそれにとどまらなかった。「安価な金は合衆国とヨーロッパの通貨からすぐさま銀を駆逐し始めた、なぜなら金の発見以前に固定されて

(167) (1896) p205

(168) (1896) p75

(169) Jevons (1863) p14, p49, p69

(170) (1896) p110, p116

(171) (1896) p116

(172) (1903) p39

いた以前の比価で、金は造幣局で過高評価され、グレシャムの法則によって唯一の流通手段として流通に入ったからである。しかし最も注意に値するのは、この金による銀の代替には反対が無いだけでなく、満足をもってみられたということである。万一、金の代わりに銀が同様に流入しても、そのような満足はなかっただろう。ここにも我々が常に存在すると考える金への選好がある。もちろんこの移行の影響は、そうでなければ下落したであろう金の価値を支え、ヨーロッパの商業国の交換手段の使用として、以前、存在した需要を銀から取り除くことだった。金の安価と過剰は、交換手段としての使用のために金への需要を増し、そのこと自体、銀への需要を減少させた。世界は二つのうちから選択することができた。かつては十分な銀があった。しかし金が過剰になるや否や、疑いなく金が選好される金属となった。⁽¹⁷³⁾ Giffen の「金属の使用における変化」とは、ラフリンによれば、この「金が過剰になるや否や、疑いなく金が選好される金属となる」ことに他ならない。1850年以降の金の生産増加は、金と銀の関係を非代替的にした。それは、「金による銀の代替には反対が無いだけでなく、満足をもってみられる」のに対して、「金の代わりに銀が同様に流入したら、そのような満足はない」だけでなく、「強い反対がある」⁽¹⁷⁴⁾ という、グレシャムの法則の非対称性として現れる。

第三に、銀の供給は一定と仮定して、金の供給が増加したら、その増加は金への貨幣的需要の増加と銀への貨幣的需要の減少を生じる。しかし他方で、金の供給を一定と仮定して、銀の供給が同様に増加しても、銀への貨幣的需要は増加しないし、金への貨幣的需要も減少しない。「それ故、金の世界供給の増加は銀を放棄する限り、その使用の拡大となっている。すなわち金量の増加があると、商業国家の一致した慣習のために、それに対応した需要の増加があるようだ。他方、銀量が増加しても、銀への需要が増加し、金が放棄されることには全くなならない。1850年以降の世界の金融史はこの言及の真実に関する強い証拠を与え

(173) (1896) p117

(174) (1931) 1, p115

(175)
る。」

これらのことは第四に、金の価値の変化と銀の価値のそれとの相互関係の非対称性として現れる、という。「最も興味深い結果は、一方の貴金属の価値の重大な変化の、他方の価値への影響だった。⁽¹⁷⁶⁾」すなわち、「…一方の金属の価値の変化、それ自体が、他方の価値の変化をもたらす。二つの金属の親密な関係は相互への反作用を生じる。しかし銀の金に対する作用は、金の銀に対する作用とは異なる⁽¹⁷⁷⁾」ということである。

ラフリンによれば、1870年以降、「疑いなく銀の価値は、金よりも容易に変化して⁽¹⁷⁸⁾おり、「二つの金属のうち、金の価値の方が変化しないことは確実となった。⁽¹⁷⁹⁾」「長期間、以前に存在した需要を銀から減じる傾向が強まっており、結局、莫大な総量（毎年の生産と比較しても大きい）がその価値をほとんど維持できない状況が作られた。銀に対する世界の大規模な行動の変化のために、最終的に突然の需要の変化に対して敏感な銀市場の状態が作られた。貨幣的需要の大部分を失い、この莫大な量は価値が重くなり、（雪崩のように）ある点から一層低い点へ落ちるように、突然の下落の可能性を示した。1876年に銀は数ヶ月で商品に対して25%まで上下した。1890年に再び大きな投機的動向のもとで、同じ程度上昇し、その後、貴金属の歴史上、最大の下落となった。⁽¹⁸⁰⁾」これが1873年以降の金銀比価の動向に示される、銀の結末である。そして銀の減価が再びスパイラル的に金の減価を招くことは、もはやありえない。

(175) (1898) p99

(176) (1931) 1, p113

(177) (1896) p111, cf.pp167-169

(178) (1896) p111

(179) (1896) p110 以上のようなラフリンの1870年代以降の金の価値の安定性の説明に対して、J.M.Keynesの次のような批判がある。「金を擁護するものとして、金は購買力の適度の安定を保つ上で、やや長期にわたり、かなりの成功を収めてきたと主張されている。…しかしそれが、この金属の供給の側に、その需要と歩調を合わせるようにさせるような、何らかの内在的な傾向があるということに帰せられるべきでないことは確かである。…もし何らかの金属が、その長い歴史的経験に基づいて、この主張をしてよいとすれば、それは金ではなく銀でなくてはならない。」 Keynes (1930) pp261-262, 邦訳 307 ページ

(180) (1898) p99

6.2 国際金本位制の成立

ラフリンの論理を踏まえて、ヨーロッパ諸国の金本位制への移行を時系列的にみてみよう。1848年のカリフォルニア、1851年のオーストラリアでの金鉱発見によって、1850年以降、世界の金生産高は飛躍的に増加した。ヨーロッパ諸国では新産金増加の影響はまずフランスで現れた。フランスは1803年以来、法定比価 15.5 対 1 の複本位制を維持していた。1820-50年の市場比価は約 16 対 1 で、銀が金を駆逐し、1850年まで実質的に銀本位だった。ところが1850年以後、金が銀に対して下落すると、それ以前とは逆に、過低評価された金が鑄造され、流入し、過高評価された銀が溶解・退蔵され、流出した。「金の登場はフランス人によって明らかに満足をもって歓迎された、それは…常に商業および文明国家の人々の銀よりも金への普遍的な選好から生じている。1848年以前、フランスとの商業状態はほとんど発展していなかった、そして大変多額の正貨を海外へ輸送する必要性はほとんどなかった。しかし1850年以後、商業状態は変化し始め、大口決済での金の使用は当然、大変便利だった。⁽¹⁸¹⁾問題は本位貨の5フラン銀貨のみならず、補助銀貨さえ流出したことである。これを防ぐため、1853年のアメリカ、1860年のスイスにならい、小額銀貨の品位を引き上げる手段をとった。すなわち1864年に20、50セント貨の純度を0.835に引き下げ、20フランまでの制限法貨とした。さらに1866年に1、2フラン貨の純度も同様に0.835に引き下げ、50フランまでの制限法貨とした。

1852-64年にフランスは約6.8億ドルの金を輸入し、約3.45億ドルの銀を輸出した。このフランスと3.1で述べたアメリカの金への貨幣的需要は金の減価を防いだ。「フランスの金需要は、金の下落を緩和する『パラシュートとして作用』した。⁽¹⁸²⁾」「この説明によって、いかに過剰な新産金が銀に取って代り、それ自身の市場を見つけ、重大な減価を食い止めたか、他方、取って代られた銀は、その需要が低下しているまさにその時、供給増加となったかがわかる。これが金の過

(181) (1896) p152

(182) (1931) 1, p176

剥が銀の価値に与えた影響だった。⁽¹⁸³⁾」フランスの銀はインドとアジアに輸出され、銀の価値の下落はある程度、食い止められた。インドでは銀への貨幣的、非貨幣的需要、共に大きかった。1852-75年にはヨーロッパからインドとアジアへ10億ドルの銀が輸出され、これは同時期の銀の総生産とほぼ同額だった。しかし1867-76年にはインドへの銀の輸出は減少し、銀需要は低下した。

1850年以降、金が補助銀貨さえ駆逐するという状況は、ラテン諸国でも同様だった。この問題に対処するため、1865年、フランス、ベルギー、スイス、イタリアの四ヶ国によりラテン貨幣同盟が成立した。同年の会議でフランス以外の三国は金本位制を主張した。フランスは法定比価15.5対1で5フラン銀貨の鑄造を維持すること、すなわち複本位制を主張した。その結果、フランスの複本位制がこの同盟の共通の貨幣制度となった。しかし実態は金本位制だった。1867年の会議においてもフランスは複本位制を主張した。しかしオランダを除く20ヶ国は金本位制に賛成し、結局、金本位制が採用されることになった。

ところで1860年以降、銀生産が増加しつつあった。「(銀への：引用者) 需要の減少は大いに増加した供給と共に、銀の価値の必然的な危機をもたらしていた。1851-75年に、次の時代に銀の全ての防御を破壊する圧倒的な力が劇的な脅威として集まった。⁽¹⁸⁴⁾」銀の価値の下落は1866年に始まり、72年以降、本格化した。「1872年に銀は金に対して下落し始め、すぐに15.5対1の比価とほとんど一致する価値に達した。万一、その下落がそこで終わっていたら、一層の困難はすべて回避されていただろう。しかし一連の出来事はこの仮定とは正反対だった。銀の下落は続き(1876年にその頂点に達した)、ラテン同盟諸国は1865年に存在したのとは正反対の状況によって脅威に晒された。当時、彼らはいかに金が補助銀貨さえ駆逐しないようにするか、を研究していた。逆に1873年までに、彼らにとって莫大な銀の流入をいかに防ぐか、という問題が占めた。⁽¹⁸⁵⁾」複本

(183) (1931) 1, pp115-116

(184) (1931) 1, p116

(185) (1896) p154

位国はこれに対処するために銀貨の自由鑄造の制限・禁止の手段をとった。ここで非対称性により、もはやグレシャムの法則ははたらかず、金本位から銀本位への移行も生じなかった。1873年にベルギーが、1874年にはフランスが5フラン銀貨の鑄造を制限した。

ドイツは1870年まで銀本位制だった。1870年の流通通貨の内訳は、金貨4.0%、銀貨69.4%だった。1870年の普仏戦争に敗れたフランスはドイツに賠償金をフランス金貨5,460万ドルとロンドン宛ての為替手形で支払った。「普仏戦争によって、フランスが金本位制を採用するのは妨げられたが、ドイツはフランスから受け取った賠償金によって銀を金に代える手段をとることができた。⁽¹⁸⁶⁾」1871年に本位貨のマルク金貨の鑄造と金銀法定比価15.5対1が定められた。続いて1873年には銀貨が補助鑄貨で、20マルクまでの制限法貨と定められた。ドイツはこれら一連の法律で法制上、金本位制へ移行した。1885年の流通通貨の内訳は1870年とは逆転し、金貨49.2%、銀貨29.2%となった。一般に、このドイツの金本位制移行に伴う銀の売却が1876年以降の銀の減価の原因と考えられている。しかしドイツの銀売却は1876年までに3,000万-3,500万ドル、1879年5月までに1.41億ドルに過ぎなかった。1851-75年の銀生産量12億8,500万ドルと比べるとわずかである。よってラフリンによれば、「1871-73年以降の銀の下落がドイツの過剰な供給に帰されると考えることはできない。むしろ銀に対する世界的な需要の減少のためだった。⁽¹⁸⁷⁾」

ここにおいてフランスは金銀の最終的な選択を余儀なくされ、金本位制を採用した。すなわち1876年に5フラン銀貨の自由鑄造を禁止した。ラテン同盟はそれに先立って1874年に5フラン銀貨の鑄造を制限していた。「ラテン同盟による5フラン銀貨の自由鑄造の禁止は銀の価値下落の結果だった。⁽¹⁸⁸⁾」「それは金と銀の歴史における重大な事件だった、しかし当時はそうみなされなかった。⁽¹⁸⁹⁾」

(186) (1931) 1, p118

(187) (1931) 1, p221

(188) (1896) p156

(189) (1931) 1, p188

「フランス当局はドイツの行為は銀の価値に影響を与える一時的な出来事に過ぎないと考えた。…当時彼ら（フランス当局：引用者）は、それ自体としてではなく、貨幣的思考から生じる一連の進展での位置の故に、ドイツの行動が重要だとは考えなかった。我々はラテン同盟による銀の自由鑄造の停止を大変重要な段階と見なさなければならぬ。なぜならそれはドイツによる銀の廃貨が属する一連の出来事のもう一つを構成するからである。」⁽¹⁹⁰⁾ 1874年当時、「たとえわら一本載せてもラクダの背骨が折れる状態だった。銀の産出が大いに増加していたまさにその時、銀の排除をもたらしたのは、金の莫大な余剰に帰される一連のすべての出来事の最後だった。」⁽¹⁹¹⁾ しかし実はそれは、その後約50年間も続く銀の価値下落の始まりに過ぎなかった。こうしてラフリンは銀の価値の下落によって、ドイツの銀廃貨よりも、複本位制・ラテン同盟の銀貨の自由鑄造禁止を重視している。

ラフリンに従って、1850-76年の金と銀の需要・供給をまとめたのが、表2である。この時期の世界の金生産は30億ドル、銀生産は12億ドルだった。フランスは1850-64年に銀本位から金本位へ移行したことによって、11.6億ドルの金貨を鑄造し、3.45億ドルの銀を輸出した。ドイツは1871-73年に銀本位制から金本位制へ移行し、4.14億ドルの金貨を鑄造し、1.41億ドルの銀を地金市場で売却した。インドは1852-75年に金を4.4億ドル、銀を10億ドル輸入した。よって同時期の金供給は30億ドル、金需要は20.14億ドルである。この差額の10億ドルの余剰の金の「大部分が金と銀の相対価値の攪乱をもたらした、大きな、そして私の考えでは主要な要因である。」⁽¹⁹²⁾ これは「商業の成長から生じた必要を、銀行業サービスの成長によって対応できなかった分を満たすために、既存の金通貨に吸収されたのかもしれない。」⁽¹⁹³⁾ 他方、銀供給は銀生産12億ドル、フランスとドイツの金本位制移行に伴う供給に、デンマークとスカンジナビア諸国の供給

(190) (1896) pp155-156

(191) (1931) 1, p119

(192) (1896) p134

(193) (1896) p175

表2 世界の金・銀の需要と供給 (単位: 100 万ドル)

年	出来事	金		銀	
		需要	供給	需要	供給
1816年	イギリス, 金本位制を確立	125			
1850-64年	フランス, 銀を金と交換	1,163			345
1867年	国際貨幣会議, 金本位制を愛好				141
1871-73年	ドイツ, 銀を金と交換	414			270
1852-75年	インド, 金と銀を吸収	440		1,000	
1874年	ラテン貨幣同盟, 銀の鑄造停止				
	デンマーク, スカンジナビア				9
1871-76年	合衆国の銀生産, それ以前の平均生産を上回る				100
	計	2,017		1,000	595
	金の追加, 1850-1876年		3,000		
	銀の追加, 1850-1876年				1,200

(出所) (1896) p134, p145, pp174-175 より作成。

900 万ドル, 合衆国のそれ以前の平均を上回る 1871-76 年の銀生産 1 億ドルを加えると, 5.95 億ドル, 銀需要は 10 億ドルだった。その差額 7.95 億ドルは銀への世界的な需要の低下のために, 「地金市場に場所を見出した。⁽¹⁹⁴⁾」 によって 1870 年代以降の銀の減価の原因は 1850 年代以降の金生産の増加である, とラフリンはいう。

6.3 「パラシュート効果」の把握

以上のラフリンの主張の根拠が, 1850 年までの貨幣としての金と銀の代替性と, 1870 年代以降の非代替性である。その把握の程度を, 当時の他の論者と比較し, 検討していこう。その際, 対象はラフリンが強調したフランスおよびラテン貨幣同盟の複本位制である。

まず先にラフリンが『1876 年報告書』を検討した際, 積極的に評価していた Giffen を取り上げよう。Giffen は次のように, 貨幣としての金と銀の非代替性を強調している。「金と銀は…貨幣として異なる機能を果たす, そしてそれらは決して代替できない。⁽¹⁹⁵⁾」ところが他方で, 「社会が…複法貨法 (dual legal tender law) によって金と銀の両方を無制限法貨として流通させようとする, そしてそ

(194) (1896) p175

(195) Giffen (1892) p101

の法律を遂行するために努力するところでは、法定比価を下回る価格で他方と交換されるその金属—それは法定比価によって過高評価される—が、もっぱら無制限法貨の目的で用いられるだろう、そしてそれに対する需要は、あたかもそれがその国の単一の無制限法貨であるかのようだろう。」⁽¹⁹⁶⁾と述べる。そして後者の例として、フランスを挙げる。「フランスでは完全法貨そして本位貨幣として、決して両方の金属が同時には用いられなかった。…完全法貨は実際、ある時期、1803-50年には銀のみ、そして別の時期、1850-73年には金のみだった。金と銀は決して両方が、同時に無制限法貨としては用いられなかった。」⁽¹⁹⁷⁾ここで Giffen は一方で貨幣としての金と銀の非代替性を述べながら、他方では複本位制におけるグレシャムの法則の作用の貫徹、すなわち両者の代替性、を認めるという自己矛盾に陥っている。当時、複本位制を支持した Nicholson はこの点を突き、⁽¹⁹⁸⁾Giffen の複本位制否定の論理を批判した。

これに対し、ラフリンは1850年代まで、あるいは1870年代以降、と時間軸を設定することによって、Giffen が陥った矛盾を回避しているかにみえる。そこで次に、その時間的間隔、1850-60年代に関するラフリンの理解が問題となる。

1850-60年代、金生産の増加は直ちに金の価値の低下をもたらしたのか、あるいは一定のタイムラグにおいて、その低下をもたらすのか、という問題が複本位制国フランスを舞台に議論された。いわゆる「パラシュート効果 (parachute effect)」⁽¹⁹⁹⁾を巡る論争である。そしてラフリンは、このパラシュート効果に関して著しく混乱した理解を示している。彼の見解を検討する前に、パラシュート効果に関して、Chevalier, Cairnes, Jevons の三人の論者をとりあげ、彼らの主張を、その一致点、対立点を中心に整理しておく。

まず Chevalier は、莫大な金生産にも係わらず、金の価値の低下が生じていないと指摘し、その原因を法定比価 15.5 で複本位制を採用するフランスに求めた。⁽²⁰⁰⁾

(196) Giffen (1892) p100

(197) Giffen (1892) p100fn

(198) Nicholson (1897) p396 cf.Chen (1972) pp96-97

(199) cf.Sayers (1933) pp582-590, Fetter (1965) pp240-249, Martin (1977)

「まず最初に、驚くべきことに、金生産は…現在までのすべてと比較しても大変、莫大だが、…他の貴金属と比べて金の価値の一層の減価は生じていない。…ここには力強い原因が介在し、金の下落を一時的に阻止している。フランスはこれまで、15 1/2 キログラムの銀に対して1 キログラムで、金の新鉱山に無限の出口を提供している。⁽²⁰¹⁾ 市場比価が法定比価 15.5 を下回ると、「金は（フランスに：引用者）大量に輸入され、以前は銀で満たされていた流通を代替し、銀は消滅している。なぜなら金1 キログラムに対して、銀 15 1/2 キログラム—この比価はフランス通貨で確立していた—に基づいて、外国から金を輸入し、銀と交換するのが収益的だからである。」⁽²⁰²⁾ 過高評価された金はフランスに流入し、過低評価された銀はフランスから東洋へ流出している。そして次のように、銀がフランスの流通から完全に駆逐されない限り、金の価値は安定している、という。「…現在、フランスの銀を引き付ける動きがわが国（フランス：引用者）からすべての5フラン（銀：引用者）貨の輸出をもたらし、その結果、この貨幣が少なくなり、15 1/2 キログラムの銀と1 キログラムの金を交換するのが不可能、または困難にさえなる時、状況は全く異なるだろう。その時から金の下落は急速になるだろう。要するに、もし現在までオーストラリアとカリフォルニアを舞台とする金の莫大な生産が、金の価値のより大きな下落をもたらしていないならば、それはフランスに原因がある。金の減価を阻止しているのはフランスである。フランスはこの金属との関連で、パラシュートの役割を果たし、それはフランス自身を犠牲にしてなされている。大きな下落が生じる時、フランスはそれを十分に理解するだろう、しかしその時は既に遅いだろう。」⁽²⁰³⁾

問題は Chevalier の「金の減価」の理解である。彼はそれをこう説明している。

✓ (200) R.Cobden (Chevalier (1859, p3)) によると、Chevalier は当初、Chevalier (1859) の原稿を 1857 年にフランス語で発表していた。それを修正、加筆したものの英訳が 1859 年に出版され、イギリスでも知られるようになった。Sayers (1933, p583) によれば、Chevalier は既に 1852 年頃、この問題に関する論文を発表していた。

(201) Chevalier (1859) pp73-74

(202) Chevalier (1859) p62

(203) Chevalier (1859) p75

「金がより高価か、安価か、それにプレミアムがついているかどうかを確実に知るための手段は、この金属の地金を金貨と比べることではない。…金の価値の上下に関するより良い、そして唯一の良い手段は、銀貨幣で測った金の価格 (its price in silver money) である、それは結局、金貨で測った銀地金の価格 (the price of silver ingots in gold coins) ということになる。そして銀の価値に突然の変化をもたらすような攪乱は生じないと約束されねばならない。それ故、現在、銀に生じている大変、決定的なプレミアムは、まさに金と銀の間に生じている乖離を示す、というのは、このプレミアムは金貨で測った法定平価 (the legal par in gold coins) と比べた銀の価格の超過を示すからである。⁽²⁰⁴⁾ 市場比価が法定比価を下回る時、銀にプレミアムが生じる。Chevalier は、この銀に生じるプレミアムが金の価値の低下を表しているという。すなわち彼によれば、「金の減価」は法定比価と市場比価の乖離によって規定されるのである。「1 キログラムの金を 15 1/2 キログラムの銀と交換することが収益的な取引だということは、別の言い方をすれば、ヨーロッパ、むしろ世界の市場で、金と銀の相対価値が変化を経験していることを証明する。その関係はもはや 1 対 15 1/2 ではない。金はもはや他方の金属の重量の 15 1/2 倍の価値ではない。この時、フランス市場で銀にプレミアムが付く。地金商人は、それらを持ち込む人に一定量の銀貨を支払う、それは金貨幣で測った法定平価 (its legal equivalent in gold money) を上回る一定量である、そしてプレミアムの大きさは 1 対 15 1/2 の関係が被っている変化の尺度である。このプレミアムは有名な事実である、それは毎日、値が付き、毎朝、新聞はそれを発表している。過去 2 年間、通常 1000 フランにつき 20 から 30 フランで変動している。時には、それは低くなる、しかし 40 フランに上昇する時もある。1000 フランにつき 20, 30, 40 フランということは、2, 3, 4% である。その差は、結局、取るに足らないものだが、フランスに大量の金をもたらし、反対に大量の銀を駆逐するという莫大な動きを作り出すのに十分である。」⁽²⁰⁵⁾ こうして生じる銀のプレミアムは 2-4% と「取るに足らない」

(204) Chevalier (1859) pp51-52

ので、Chevalier は「金の減価は阻止されている」と考えたのである。

これに対し Cairnes と Jevons は、このパラシュート効果に疑問を呈した⁽²⁰⁶⁾。Cairnes⁽²⁰⁷⁾はその根拠として、まず批判の矛先を Chevalier の「金の減価」把握に向ける。「この問題に関する論争で、金の価値の変動を見出すために、金で測った銀の価格に優るテストは選択され得ないと、ほとんど一致して仮定され、認められている。そして銀の価格は過去 10 年間で 3、4%以上、上昇していない、この割合は金に生じる減価の可能性の最大の程度を示すと論じられている。…彼らは銀の価格の上昇は、金の価値の下落のためというよりも、銀への需要の増加のためだと主張する。しかし確かにこうして提示される価値のテスト以上に誤ったものはありえない⁽²⁰⁸⁾。」「奇妙なことに、Chevalier が挙げる事実は実際、その誤りを明らかにするが、彼はこう譲歩する。『金の価値の上下に関する唯一のよい尺度は、銀貨幣で測った金の価格である。』彼はこうも付け加える。『そして銀の価値の突然の変化をもたらすような攪乱は生じないと約束されねばならない。』と。しかしそんな攪乱、それ自体が、金の価値の変化によってもたらされる⁽²⁰⁹⁾。」

Cairnes の第二の主張が次のような、貨幣としての金と銀の代替性である。「もし他方の商品の価値を測るという理由で、一方の商品が不適切になるならば、それは両者が、共通の目的に適用される状況である。小麦をエンバクと比較することによって、小麦の変動を測ると考える者はいないだろう、両方の穀物は同じまたは同様の目的のために用いられるので、一方の価値のいかなる変化も確かに、他方に及ぶ。例えば、小麦の収穫が過剰で、他方、エンバクの収穫が平均的な時、常に消費—通常、エンバクに対するもの—の一部は小麦に向かう。その影響はすぐさま、より過剰な穀物の価格の低下を阻止する、また他方への需要を縮小することによって、その価格は低下する。それ故、一方の商品の過剰の影響

✓ (205) Chevalier (1859) pp63-64

(206) cf. Bordo (1975), Laidler (1982)

(207) 初出は 1860 年である。Cairnes (1873) p109

(208) Cairnes (1873) pp140-141

(209) Cairnes (1873) p140fn.

は両者に及び、価格の低下は、程度が広がるのに比例して、程度が小さくなる。今や、これがまさに金と銀の関連で起こっていることである。金の生産は異常に大きく、供給の増加はその価値の下落をもたらしている、その価値の下落は銀に代替している、それ故、大量の銀が以前、機能すべく用いられていた目的から解放された、その結果、両方の金属の価値が共に下落している、それが起こっている部分が拡大するにつれて、下落の程度は小さくなっている。これまでこの金と銀の交換が大規模に示されている舞台はフランスの通貨である、そこでは複本位制または（もし M.Chevalier がその文句を好むなら）複法貨の存在のために、世界市場でのその価値がフランス造幣局での評価との関連で変動するのに応じて、一方または他方の金属が用いられる。⁽²¹⁰⁾ こうして Cairnes は貨幣としての金と銀の代替性にもとづき、「両方の金属の価値が共に下落している」と論じた。

次に Jevons によれば、1845-50 年と 1860-62 年を比較すると、物価は少なくとも 9%、または 14.0% 程度下落している。⁽²¹²⁾ すなわち、「金の価値の重大な下落が確認」される。⁽²¹³⁾

また、「Chevalier によって、銀の金価格は一定だと説明されている。しかし私はその問題に関する筆者の考えの大きな見落としを指摘しなければならない。……フランスで多くの銀貨が通用し、貨幣法が存続する限り、商人は金を輸入し銀を輸出することによって、フランスにおける市場および法定比価の差、マイナス現送費、保険料等を獲得することができる。Chevalier は正当にも、この状況が続く限り、ロンドン、ブリュッセル、ハンブルク、ニューヨーク、その他商業の大中心地でさえ、金の価値が銀の重量の 15 1/2 倍を大きく下回ることはあり得ないだろう、と論じる。彼はこれを根拠に、フランスの銀通貨を『金の価値の下落

(210) Cairnes (1873) p141

(211) Jevons (1863, p45) は後者を「まさに商業的干潮時 (very low water of the commercial tide)」と捉えている。

(212) Jevons (1863) p14, p49

(213) Jevons (1863) p55

を阻止するパラシュート』を呼ぶ。ここには大きな見落としがある。フランス通貨は金が昔の『銀に対する相対価値 (relative value to silver)』をずっと下回るのを防いだかもしれないし、実際、そうだった。しかしそれは金銀、両方の価値の下落を防ぐことはできない。私の物価表からの必然的な結論は、金は例えば9%下落しているということである。銀の価値は金に対して3%上昇している、その差『6%は必然的に銀の減価を示す。』フランス通貨の変化から、銀が金の下落に一時的に関係したはずだ、と考えることは困難ではない。⁽²¹⁴⁾ Jevons は、確かに「金の銀に対する相対価値」、すなわち金銀市場比価は安定的だ、と Chevalier の主張を認めた上で、しかし「金銀、両方の価値の下落を防ぐことはできない」と考える。その根拠は、Cairnes と同様、貨幣としての金と銀の代替性である。彼はそれを以下のような比喩を用いて説明する。「ちょうど既に満ちた貯水池の一方への流入が、他方からの流出を生じるように、フランスへの金の異常に過剰な流入は銀の異常に過剰な流出を生じる。両方の金属が共に減価している。そして万一、フランスの貨幣法が存在しなければ、金のみが同程度、下落しただろう。実際はそれ程、低くなかった。なぜならその法律によって直接の使用、またはフランスの銀を下落した価値で処分し、そこに金を置くことによって間接的に、新産金を処分することが可能だったからである。二つの商品の価値の間のこの同調に、何ら新しい点も、奇妙な点もない。他方で一方を多少、代替できるような二つの金属も、価格は共に変動する。一方の金属の相対的な過剰は、通常、他方によって満たされる消費のチャンネルにあふれ出る。小麦が安価な時、飼料として、蒸留のために、そして劣った穀物、その他生産物が通常、用いられるさまざまなその他の用途のために、無駄に用いられる。それ故、小麦が安価なら、ほとんどその他の農作物も安価になり、同様に他の商品群も安価になる。」⁽²¹⁵⁾

そして Chevalier の、銀がフランスの流通から駆逐されるや否や、金の減価が

(214) Jevons (1863) pp55-56

(215) Jevons (1863) pp57-58

加速するだろう、という主張に対しても、こう反論した。「Chevalier は金の価値は以前の半分に、すなわち 50%下落するかもしれない、と示唆する。…私はその下落は多分、30%に抑えられるだろうと考えざるを得ない。15%ほどの減価は既に起こっているとさえなくもないので、より重大かつ急激な下落は既に生じていることになるだろう。」⁽²¹⁶⁾

このように、パラシュート効果に関する論点は、複本位制における「金の減価」の理解、そして貨幣としての金と銀の代替性の理解、である。⁽²¹⁷⁾以下、この二つを視角として、パラシュート効果に対するラフリンの見解を検討しよう。

第一に先に引用した通り、ラフリンは 1850 年以降の金生産の増加の直接の影響を、「疑いなく、金の価値の低下、言い換えれば、一般消費財に対する購買力の減少だった」⁽²¹⁸⁾と述べている。そして先の Jevons の 1845-50 年から 1860-62 年間の物価指数から測った数字を引用し、この金の購買力の低下を 9-15%とみなしている。⁽²¹⁹⁾⁽²²⁰⁾

他方で既に 3.1 でみたように、合衆国で 1853 年当時、法定比価 16 に対して市場比価が 15.7 と下回った時、ラフリンはその状況を法制上は複本位制だが、実態は金本位とみなし、以下のように論じていた。それはこのパラシュート効果による「金の価値の低下」の理解とは、著しい相違を示している。「金の価値の下落は、金が銀を駆逐するスピードを増すように作用した。この変化した関連は金価格で表した銀铸貨の価値 (the quotations of silver coins in gold prices) に現れる。1 ドル、二つの半ドル、4 つのクォーターの純銀の量は 371.25 グレインで、1 ドル金貨では 23.2 グレインだった。1834 年法は金が銀の 16 倍の価値を

(216) Jevons (1909) p69

(217) この他に、1 東洋への銀の流出増加の原因を、「遠方の東洋への輸出による突然の需要」(Chevalier (1859, p65)) とみるか、「金銀の減価」(Jevons (1863) p59) と考えるか、2 既に生じた金の減価の程度、に関して、意見の相違があった。これらの論点はラフリンの分析にとって直接、関係ないので、ここでは考察しない。

(218) (1896) p75

(219) Jevons (1863) p49, p69

(220) (1896) p110, p116

もち、金 23.2 グレインは銀 371.25 グレインと等価だといった、しかし市場は法的な決定によって影響を受けず、価値はどんな法律によっても固定されない。1853 年の二つの金属の市場価値は約 1 対 15.4 の比率と仮定された、1 ドル金貨は市場で銀 23.2 グレインの 15.4 倍、357.25 グレインを買うことができた。この量は法定銀ドルを 14 グレイン下回った。しかしもし 357.25 グレインが 1 ドル金貨と等価なら、371.25 グレインは市場で 1 ドル金貨以上の価値をもっただろう、すなわち銀ドルは 1853 年に 1 ドル金貨で約 104 セントの価値だった。⁽²²¹⁾ここでは、この当時、銀ドルは貨幣としては 1 ドル、地金としては 104 セントの価値だったこと、そしてこの銀に生じるプレミアムが「金の価値の下落」を表すことを述べている。

このようにラフリンが同じとみなす状況下で、合衆国では金の減価は銀地金のプレミアムによって表されると論じながら、フランスでは金の減価が金の購買力の低下によって表されるというのは、論理的一貫性を欠いている。法制上は複本位制、実態は金本位において、金の減価は銀地金のプレミアムによって表される、という理解が正しい。⁽²²²⁾ラフリンはフランスに関しても、Jevons のように金の購買力の低下ではなく、Chevalier と同様、銀のプレミアムによって金の減価を捉えるべきであった。

そして第二に、ラフリンは「フランスの金需要によって、金の下落を緩和する『パラシュートとして作用』した。」⁽²²³⁾と述べ、その効果を認めている。しかし先

(221) (1896) p77

(222) Ricardo (1810, pp1-4, 邦訳 1-4 ページ) は、金銀複本位制下で市場比価が法定比価を下回る時、「金がかならず価値の標準尺度 (the standard measure of value) となり」、「金地金も銀地金も、ないしどの商品も、銀貨によって測られるのではなくて金貨によって測られ」、逆に市場比価が法定比価を上回る時、「銀が価値の標準尺度となりましょう」と述べている。そして後者の時、「鑄造価格を上回る…金地金の市場価格の超過」が生じる、と述べている。また Marx (1859, 92 ページ) は、「フランスのように、両金属が法定の価値尺度であり、両方が支払で受け取られなければならないが、しかも各人は任意にどちらでも支払いうるような国々では、価値の上昇する金属には打歩を生じ、他のどの商品とも同じように、過大評価された金属でその価格を測るのであって、この後者の金属だけが価値尺度として役立つのである。」と述べている。これはパラシュート効果に関する Chevalier の理解、1853 年当時の合衆国に関するラフリンの叙述と同じである。

の通り、Jevons は金の購買力の低下で測って金の減価が著しいことを根拠に、パラシュート効果を疑問視していた。その Jevons の金の減価の推定に基づきながら、パラシュート効果の存在を認めるという矛盾がここにある。つまりラフリンによれば、金の減価はわずか 9-15% という認識である。

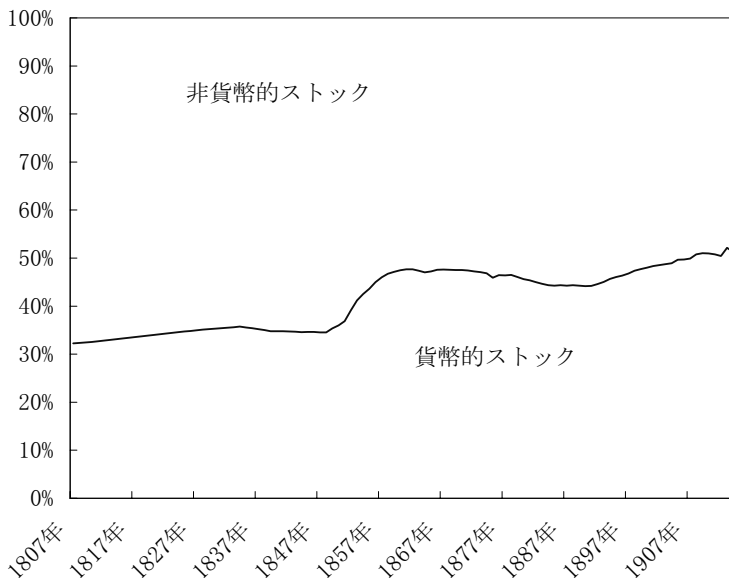
第三に、ラフリンの次の叙述があった。「安価な金は合衆国とヨーロッパの通貨から、すぐさま銀を駆逐し始めた、なぜなら金の発見以前に固定されていた比価で金は造幣局で過高評価され、グレシャムの法則によって、唯一の流通手段として流通に入ったからである。しかし最も注意する価値があるのは、この金による銀の代替は、反対がないのみならず、満足をもって見られたということである。万一、金の代わりに銀が同様に流入したら、そのような満足はなかっただろう。ここにも我々が常に存在すると考える金への選好がある。この移行の影響は、もちろん、そうでなければ下落したであろう金の価値の下落を防ぎ、西洋の商業国の交換手段として、以前に存在した需要を銀から取り除くことだった。金の安価と過剰は、交換手段としての使用のために、金への需要を増し、そのこと自体、銀への需要を減少させた。世界は二つのうちから選択することができた。十分な銀があった、しかし金が過剰になるや否や、疑いなしにすぐさま、それが選好された。それは現代世界において輸送手段として、鉄道と駅馬車の選択がなされるのと同じことだった。選択が可能なところではどこでも、最良かつ最も便利な交通手段が用いられた。同じ考えは、以下の通り、Cairnes によって表されている。『もし何かが、他方の価値を測るために一方の商品が不適切になるならば、それはそれら両者が、共通の目的に適用されるかもしれない状況である。……これまでこの金と銀の交換が大規模に示されている舞台はフランスの通貨である、そこでは複本位制または（もし M.Chevalier がその文句を好むなら）複法貨の存在、のために、世界市場でのその価値がフランス造幣局での評価との関連で変動するのに応じて、一方または他方の金属が用いられる。（この部分は…部分を含めて、先の Cairnes の引用（注（210））と同じ：引用者⁽²²⁴⁾』

パラシュート効果の存在を認めながら、Cairnes を引用していることは、もはやここでは問わない。問題は、ラフリンが「輸送手段として」「最良かつ最も便利な」「鉄道」と、もはや便利ではなくなった「駅馬車」という表現を用いて金と銀の非代替性を主張しながら、「同じ考え」として、Cairnes の「小麦」と「エンバク」の比喻による両者の代替性の説明を引用している点である。ここにもラフリンの矛盾がある。というのは、この貨幣としての金と銀の代替性か、非代替性かの認識の相違が、金と銀の価値変動を規定することになるからである。先にみたように、Cairnes と Jevons は、貨幣としての金と銀の代替性に基づいて金と銀の減価を主張した。これに対して、ラフリンは「金による銀の代替は、反対がないのみならず、満足」があるのに、「金の代わりに銀が…流入したら、そのような満足はない」という金と銀の非代替性を根拠に、金の減価が銀の減価をもたらす、と説明するのである。このように、ラフリンはパラシュート効果の論点を正確に理解できていなかった。

第四に、貨幣としての金と銀の非代替性とは、貨幣的需要が銀から金へと変化し、もはや逆にはならないことである。そしてラフリンが表 2 で示した金・銀の需要は共に、貨幣的需要のみである。問題は、この金への貨幣的需要の増加が、ラフリンのいうように金の価値の安定性をもたらしたのか、という点にある。図 6 は、世界の金の貨幣的需要と非貨幣的需要の割合を表している。金の貨幣的需要は 1850 年を境に、それまで 35%程度だったのが、50%へと上昇している。それは確かに金の貨幣的需要の増加を示している。しかし金の非貨幣的需要は依然として、需要の半分を占めている。この点から、金の貨幣的需要の増加のみから金の価値を論じること、しかもその安定性を論じることには無理がある。

最後に、ラフリンは 1850 年以降の購買力の低下によって表される金の価値の一時的な下落が、銀の価値にどのような作用を与えたというのか、その内容を見てみよう。ラフリンはこう分析している。まずロンドン銀市場での銀価格から、1872 年 11 月にその下落が始まったこと、1876 年前半に急激に下落したこと、そ

図6 世界の金ストック



(注) 貨幣的金ストックは、公的金準備、銀行および非銀行の保有する金貨。

(出所) U.S.Commission (1982), p198 TableSC-7 より作成。

(原資料) League of Nations (1930) pp82-84 TableB

れ以降も 1885 年まで一貫して下落し続けていることが認められ、「1872 年以降、銀は金に対して非常に下落しているといえる。」⁽²²⁵⁾ しかもその間、同時に金の購買力も上昇していたならば、それは「他の商品もまた金に対して下落」したことを意味し、「銀が金に対して下落しても、銀を其他商品に対して以前と同じ関係に置くことになり、それ故、銀の価値が下落したのではなく、金の価値が上昇したといえる。」⁽²²⁶⁾ そこで 22 種類の商品群からなる物価指数を算出すると、「物価は 1875 年と同様、1876 年と 1877 年に高く、1868 年から 1871 年よりも高かったことがわかる。」⁽²²⁷⁾ 「すなわち、物価が物語る限り、金の価値が上昇している

(225) (1896) p162

(226) (1896) pp162-163

(すなわち物価が低下したので金の購買力が上昇している) ということは、何ら真実でないといえる。もし 1871 年から 1877 年に金が他の商品に対して同じ購買力を維持したならば、銀は金に対してのみならず、(金を含む) その他すべての商品に対しても低下したということは、全く正しい。1872 年の銀の平均価格、60 1/4 ペンスに対して、1876 年 7 月には 46 3/4 ペンスに低下したことは、銀の価値が 22% 以上、低下したことを示している、すなわち銀は 1876 年 7 月までに他の商品に対する購買力を 22% だけ失った。⁽²²⁸⁾ 以上のように、金の購買力の変動と銀の価格の変動との比較から銀の購買力の低下、すなわち「銀の減価」を導き出すという思考は、先の Jevons のそれと同一である。そしてラフリンは金および銀の購買力から 1870 年代以降の金の価値の安定性、銀の価値の不安定性を論じている。しかし金の価値の安定性を主張するラフリンの立場からすれば、1870 年代以降の「銀の減価」をいうには、金銀比価の動向を示すことで十分、説明されるはずである。あえて購買力概念を持ち出したことは、ラフリン自身、1870 年代以降の金の価値の安定性を論じることに躊躇があったことを表している、と考えられる。

これらの点は、彼の主張した「1850 年代の金生産の増加」と「1870 年代以降の銀の価値の低下」との因果関係が、説得力に欠けることを示している。そしてラフリンは、1870 年代以降の貨幣としての金と銀の非代替性を論じる際に、価値の安定性、不安定性ではなく、商取引の拡大とそれに伴う流通空費の節約を強調すべきであった。⁽²²⁹⁾

(未完)

✓ (227) (1896) p163

(228) (1896) p164

(229) 注 (163) 参照。

引用・参考文献

- Bordo, M.D. (1975), "John E.Cairnes on The Effects of the Australian Gold Discoveries, 1851-73:An Early Application of the Methodology of Positive Economics" *History of Political Economy*, vol.7 no.3, Fall
- Cairnes, J.E. (1873), *Essays in Political Economy*, reprint 1965, New York:Augustus M.Kelley Publisher
- Chen, C. (1972), "Bimetallism:Theory and Controversy in Perspective" *History of Political Economy*, vol.4 no.1, Spring
- Chevalier, M. (1859), *On the Probable Fall in the Value of Gold*, reprint 1968, New York:Greenwood Press, Publishers
- Fetter, F.W. (1965), *Development of British Monetary Orthodoxy 1797-1875*, Cambridge, Massachusetts:Harvard University Press
- Giffen, R. (1892), *The Case against Bimetallism*, 2nd ed. London:George Bell & Sons
- Gold and Silver Commission (1888), *Final Report of the Royal Commission Appointed to Inquire into the Recent Changes in the Relative Values of the Precious Metals, Presented to both Houses of Parliament in The Monetary Problem:Gold and Silver* reprint 1936 editor R.Robey, New York:Columbia University Press
- Jevons, W.S. (1863), "A Serious Fall in the Value of Gold Ascertained, and Its Social Effects Set Forth" in *Investigations in Currency and Finance* by W.S.Jevons editor H.S.Foxwell 2nd ed. London:Macmillan and Co., Limited
- (1923), *Money and the Mechanism of Exchange*, 25th ed., London:Kegan Paul, Trench, Trubner & Co.Ltd.
- Keynes (1930), *A Treatise on Money* in Two Volumes in *The Collected Writings of John Maynard Keynes* vol.VI 1970 The Macmillan Press Ltd 長澤惟恭訳『ケインズ全集第6巻 貨幣論Ⅱ 貨幣の応用理論』東洋経済新報社, 1980年
- Laidler, D. (1982), "Jevons on Money" *Manchester School of Economic and Social Studies*, vol.50 no.4, December
- Laughlin, J.L. (1896), *The History of Bimetallism in the United States*, reprint 1968 New York:Greenwood Press Publishers
- (1898), *Report of the Monetary Commission of the Indianapolis Convention of Boards of Trade, Chambers of Commerce, Commercial Clubs, and Other Similar Bodies of the United States*, Indianapolis, Indiana:University of Chicago Press
- (1903), *The Principles of Money*, New York:Charles Scribner's Sons
- (1931), *A New Exposition of Money, Credit and Prices* 2vols.Chicago, Illinois:University of Chicago Press
- League of Nations (1930), *Interium Report of the Gold Delegation of the Financial Committee*, Official No.C.375.M.161., reprint 1979 New York:Arno Press
- Martin, D.A. (1977), "The Impact of Mid-Nineteenth Century Gold Depreciation upon

- Western Monetary Standards” *Journal of European Economic History*, vol.6
- Marx, K (1859), *Zur Kritik der Politischen Ökonomie* 杉本俊朗訳『経済学批判』国
民文庫4, 大月書店, 1995年
- Nicholson, J.S. (1897), *Treatise on Money and Essays on Monetary Problems* 4th ed.,
London:Adam and Charles Black
- Ricardo, D. (1810), “Ricardo to Honer” in *The Works and Correspondence of David
Ricardo* edited by P.Sraffa vol.VI 1962 Cambridge:Cambridge University Press 中
野正監訳『リカード全集VI』雄松堂, 1970年
- Sayers, R.S. (1933), “The Question of the Standard in the Eighteen-Fifties” *Economic
History, A Supplement to Economic Journal*, vol.2 no.8 January
- Select Committee on Depreciation of Silver (1876), *Report from the Select Committee on
Depreciation of Silver;together with the Proceedings of the Committee, Minutes of
Evidence, and Appendix in Irish University Press Series of British Parliamentary
Papers:Select Committee Report with Minutes of Evidence Appendix and Index together
with Papers from British Representatives Abroad and the Indian Government on the Fall
in the Price of Silver 1876-86 Monetary Policy Currency* 6, 1969 Shannon, Ireland:Irish
University Press
- Seyd, E. (1868), *Bullion and Foreign Exchanges*, reprint 1974, New York:Arno Press
- U.S.Commission (1982), *Report to the Congress of the Commission on the Role of Gold
in the Domestic and International Monetary Systems*, 2vols.Washington, D.C.:U.S.
Government Printing Office
- U.S.Department of Commerce Bureau of Mines (1930), *Economic Paper 8 Summarized
Data of Silver Production* by C.W.Merrill, Washington, D.C.:Government Printing
Office
- U.S.Director of the Mint (1913), *Annual Report of the Director of the Mint for the Fiscal
Year ended June 30, 1912 and Also Report on The Production of the Precious Metals
in the Calender Year 1911*, Washington, D.C.:Government Printing Office
- Walker, F.A. (1897), *International Bimetallism*, New York:Henry Holt and Company